

寺子屋プロジェクト和尚さんのお話 第12回：「和尚と法話」

12月5日（日）に東京都練馬区の臨済宗の廣徳寺さんで開催される臨済会の『禅をならう』集いの坐禅会において、前座に法話をさせていただきます。

臨済会の坐禅会での法話は、東京の谷中の全生庵さんでさせていただいて以来の2回目となります。

それで、竺園寺坐禅会の皆さんより「法話とはいったいどういうお話ですか」という質問をいただきました。

今日の寺子屋プロジェクトでのお話は、テーマを「和尚と法話」と題しまして、その質問への回答として自分なりの「法話」のお話をさせていただきます。

和尚とは、基本的に布教するものですから、和尚の恰好で在家の皆さまにお話するときは、どんな世間話や愚痴っぽい話であろうと、布教のための「法」の理を滲ませているはずで

ということは、和尚の恰好でする話は、布教の法話として聴く事ができます。もっと言えば、言葉だけではなくて、行動も、たとえ、煩惱まみれの行動であれ、煩惱の行いだと気づき、懺悔して行いを改め、それを話に役立てれば法話となります。生き方も布教の一環かもしれません。

つまり、和尚といわれるものは皆布教師であり、在り方そのものが布教なのかもしれません。

私は、臨済宗連合布教団本部の任命で布教師として、毎年春に巡教として各地の臨済宗連合各派の寺院様で法話をさせていただいております。また、関東地区布教師会の調整のもと、臨済宗連合各派の関東の寺院様の夏のお施餓鬼の法話もさせていただいております。

そこでの法話は、檀家の皆さんへのお話を中心に、自然、年配の方が多いことから、坐禅会とは異なり、禅の独特の言葉はあまり使わず、なるべく平易な言葉で仏教の匂いがあまり臭くならないようにと心掛けています。

そういった檀家さんへの法話では、熱心に聞いてくれる人がいればその人に視線をあわせて、次第に説法も興を帯びてくることになるのですが、話し始めるや居眠りをされる人が前にいたりするとどうしてもリズムに乗れないことがあります。

そんな時、松原泰道師の著作の中の「聴衆が一人もいなくても、ご本尊に向かって話をする。」という言葉に出会って、ハッとさせられました。

私は、できるだけ自分の体験、失敗談を織り交ぜて、恥をさらけ出す思いで、話をしています。

「ああ、あのとき何故あんなことをしてしまったのか、あのとき自分がこだわったものは、本当に大事なものだったのか？」

自分の行動が間違っって苦しい思いをしたのは、怒りの感情や貪りの欲が行動を歪ませた訳だけど、怒りや欲が湧いたのは自分のありもしない体面やくだらない自尊心を傷つけられたからなのか。そんなものが、どこに隠れていたんだ。一体何を守ろうとしていたのか。ああ、なんて恥ずかしいんだ。」と反省するわけです。

お寺のご本堂でお話をさせていただく時、そこには、そのお寺様の法が染みついていて、法の匂いがするのです。

自分の恥をさらすお話をしているとそのお寺様の仏様に叱られているつもりになれます。

本当に「恥ずかしい」という思いから、反省を経て、何かしら清々しい気持ちになることができます。

今回の臨済会の坐禅会の前座としての法話では、ご本山の大徳寺のご開山である大燈国師が花園法皇のお后様に禅をお教えしたときに与えられた公案の「本来の面目」についてお話をする予定です。

「本来の面目」、本当の面構えということです。本当の自分、裸の自分自身ということ、本当の自分の在り方・生き方だと思います。

それが、見えなくなっているから、課題になってくるのです。

それを見えなくさせているのは何でしょうか？

「面目」、本当の自分、裸の自分自身を覆い隠すものがあるとすれば、体面や自尊心や自分自身を飾るもの、裸を隠すもの、それは、煩惱だと考えます。

その出発点は、「私」という自我意識です。

現在の自分と対立する過去の自分を含めた他者と比較して、勝ろうとして起き上がってくる「私」という自我意識が、煩惱の出発点です。

そして「私」という意識から発展して、「私のモノ」という「私」の所有の意識が凝り固まり、欲や感情が暴走すると煩惱が表れてくると考えます。

多かれ少なかれ煩悩は、誰でも、人それぞれに持っています。

人間として、生きている証である煩悩が、人に纏わりついて、「本来の面目」を見えなくさせているとすれば、どうしたら、「本来の面目」を見ることができるようでしょうか。

本来の面目は、何者で、何処にあるのでしょうか。

それを問い続け、究めつづけていくことが坐禅なのではないでしょうか。

煩悩とは、人間の行いの結果・影響である「業」を作り出すものです。

花園大学の佐々木教授は、仏教が説く「生まれ変わり、輪廻」とは魂が生まれ変わるのではなく、「業」すなわち煩悩による行いの影響の凝り固まったものが、輪廻し転生することを指しているとおっしゃいます。

私は煩悩から脱けきれません。煩悩あつての私とも言えるでしょう。

そうした失敗の体験を話して恥をさらし、素直に人生を見つめ直し、素直に恥多い人生に向き合う、そのことを法話のなかで話しかけるのが、布教師の役割と今の自分では思っています。

ですから、和尚として法話をするということは、堂々と恥をかいて、素直にお釈迦様や祖師方、老師方そして皆さん方のことを聞いて、反省し、それを皆様に清々しい気持ちでお話をする。

最低の恥まみれであり、最高の清々しさのある生き方（道）なのです。

今日は、布教師、法話についてのお話でした。

蛇足) 私の故郷は、熊野古道—伊勢道—の一角にあり、古来多くの僧侶・行者が、京の都やら諸方から熊野詣で往来したのでしょうか。古くは、西行法師が高野山から熊野をお参りした後、海路で桑名に向かったことが伝えられています。また、江戸時代には、現在の和歌山県田辺出身の僧侶 徳本 上人(浄土宗)が、当時たいへん名高い布教師であったとか、石碑が残っています。その僧侶や行者たちは、熊野参拝の途中で布教、説法をしたことでしょうか。それが方言として言葉に残っているのではと、お話から気付きました。

例えば、その地方の方言で腹がたつ、怒ることを「ごうわく」とか「ごうをわかす」、人に意地悪をして怒らせることを「ごうをいらす」と言います。この「ごう」は、「業」でしょう。また自分のことしか考えず迷惑な行為をする(主に子ども)を「がり」と呼んで、叱ります。これは「我利」でしょう。

いずれも昔、仏教を説いた布教師が、「業を 入らすな」（例えば若い母親が赤ん坊や子供を叱って泣かせるのをたしなめて）或いは「我利をするな」と戒めたそれが由来でしょうか。少し振り返って見渡してみると仏教の教えがずっと離れがたく、人々の身についていたことが感じられます。教えはいまでも現代に生きる人の意識の一隅に、かならず残っているものと思います。

（ネットで検索すると「ごうがわく」は、兵庫県姫路付近でも使われているようです。また「がり」は叱ることの意として、歌舞伎の用例が出ていました。前者は京都を中心に同心円上にある場所・地方で、昔の言葉が、方言として同じように残るといふ通説があるそうですが。それが確かめられました。）

（文責 中村彰利）